



Title	メイヤロフの『ケアの本質』を読み解く（前編）： ケアリングにおける「成長」について（序章からⅣ章 まで）
Author(s)	小川, 長
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2017, 51, p. 69-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71388
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

メイヤロフの『ケアの本質』を読み解く（前編）

——ケアリングにおける「成長」について（序章からⅣ章まで）——

小川 長

キーワード：ケアリング／成長／専心／過程

『ケアの本質』の序は、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである（“To care for another person, in the significant sense, is to help him grow and actualize himself.”）¹⁾（p.13）という文章で始まる。この意味深い言説は、本書の中で形を変えながら幾度も繰り返される。さらに、序には“ケアすること（caring）”と“人生の落ち着き場所にいる（in place）”という二つの概念は、人間であることについて実りある考え方を提示してくれる」（p.16）。そして、最も重要なことは、それらが私たち自身の生（our own lives）を私たちが理解するのを助けてくれることだろうと記されている。本稿（前編）で行うのは、まさに前者の“ケアすること”に関する考察であり、特にケアにおける成長について考えるが、それは、冒頭の深遠な言説の持つ意味の探求である。

1. 基本的なパターン

「ケアの相手が成長するのをたすけることとしてのケアの中で、私はケアする対象を、私自身の延長（extension of myself）のように身に感じとる（experience）。また、それと同時に、その対象が本来持っている権利ゆえに私が尊重する確かな存在として、私とは別のものとしてそれを身に感じとるのである」（p.18）。ケアの関係とは、他の人への不健全な依存や寄生のような依存関係ではなく、相手を支配したり所有したりすることでもない。私は、

私の幸福 (well-being) と相手の成長とが結び合っていると感じている。また、ケアする相手が様々な可能性と成長する欲求を持ち、成長のために私を必要としていると感じ取っている。さらに、その成長を援助する時、私は自分の方針を他者に押し付けず、他者の成長の方向性に従ってどう対応するか決めていくのだが、その方向性を“他者の志向任せ (other directed)”と混同してはならない。それは、私自身とも相手とも接触を失った一種の服従である。私が他者に与えるどのような方向付けも、その人本来の姿 (integrity) に対する尊重の念に支配され、相手がより成長するよう意図されている。この尊重の念は、私の行動が実際に一層の成長をもたらしているか否かに関心を持ち、私が見出したものに私の行動が導かれていることで示される。

この文脈の中で特徴的なのは、「その対象が本来持っている権利ゆえに私が尊重する確かな存在として」ケアの相手を捉えていることである。このフレーズは、この後も何度も繰り返されるが、それを説明していると思われる箇所は、上記の「ケアする相手が様々な可能性 (potentialities) と成長する欲求 (the need to grow) を持ち」という部分以外には特に見当たらないので、これがMayeroffの言う、その人自身が本来持っている権利の意味であるというだけではなく、Mayeroffの論理の大前提だと考えられる。

一方、専心 (devotion) はケアにとって本質的なものであり、専心が失われるとケアも失われる。まさに、この他者 (*this other*) へのケアが実質を持ち、固有性を帯びるのは専心を通してである。特定の場面では、専心はその人のために“そこに”居ることで示されるが、長い目で見れば私の一貫性により示される。その一貫性とは逆境での粘り強さであり、自ら進んで困難の克服に立ち向かうことである。専心の帰結である義務 (obligations) は、ケアを構成する本格的な因子である。私は、それを押し付けられたものや必要悪とは感じない。私が行うことになるだろう行為と、私がしたい行為は一つの収斂点を持つ。また、実際のケアの場面における他者とは、常に特定の (specific) 誰かなのであり、何かなのである。²⁾

Mayeroffによれば、専心とは相手の成長を信じ、成長のために専ら相手に

打ち込むことである。それは相手と自らを信じ、逆境であってもそれを疑わないということであり、実際に相手の成長のために様々な手助けをし、困難な中でもそれを諦めないということである。こうした専心はケアにとって本質的なものなのであり、専心がなければケアは成立しない。それ故に、実際のケアの対象は常に特定の相手でなければならないということなのである。

2. 人の成長と観念の成長

ここでは、「成長」と「自己実現」の本態（nature）を特に考察するのではなく、これから述べることに役立つものと考え、人の成長とケアリングの哲学的観念（philosophical idea）の成長について簡単に触れるとされている。これは、いわゆる人の成長に関する普遍的な（general）ものだが、具体的なレベルでは子供の成熟への成長、未成熟な大人の成熟への成長、成熟した大人の成長といった違いがあるだろう。しかし、ここでの成長に関する見解は、こうしたレベルの違いを超えた普遍的な成長の意味合いだとしている。

ここでMayeroffが成長について、「人の成長」と、その人における「ケアリングの哲学的観念の成長」の二つを示していることに留意しておきたい。

「成長するのを援助することは、少なくともその人が、何かあるもの、または彼以外の誰かをケアできるように援助することにほかならない」³⁾ (p.29)。これに続く文脈は、先行研究での参照が多いので邦訳書を引用しておく。「またそれは、彼がケアできる親しみのある対象（areas of his own）を発見し創造することを、励まし支えることでもある。そればかりではなく、その人が自分自身をケアすることになるように援助することであり、ケアしたいという自分自身の要求に目を閉じず、応答できるようになることをとおして、彼自身の生活に責任を持つように彼を援助することである」(p.29)。ここまでは、人の成長への援助に関する記述である。続いて、人が成長することに関する記述が始まる。「成長することは、その人が新しいことを学びうる力を

持つところまで学ぶことを意味する。さてそのとき、学ぶとは、知識 (information)⁴⁾ や技術を単に増やすことなく、根本的に新しい経験や考えを全人格的に受けとめていくことをとおして、その人格が再創造される (re-creation)⁵⁾ ことなのである」(ibid.)。

私は、自分自身の経験に基づいた価値や理想を選択することで、より自己決定できるようになり成長する。私はより良い決定ができるようになり、進んでその責任を引き受けるようになる。私は、自分にとって大切なものを見つけ、それを成し遂げるため自らを鍛え節制できる。人は自らに、より正直になり、社会や自然の秩序 (social and natural order) に一層気付くことで成長する。迷いが小さくなり自身を見つめられるようになると、手段と結果の客観的な構造も理解できるようになる。

つまり、Mayeroffの論理は次のようになる。人の成長とは少なくともその人が自分以外の誰かをケアできるようになることであるので、他者の成長を援助する段階は、まず彼がケアできる対象を見つけることを助け、それをケアすることができるようになるよう支援し、彼以外の者のケアを通じて得た経験と知識で彼自身をケアすることを助け、彼自らの責任でケアが行えるように支援していくということになる。一方、成長するとは、新しいことを学びうる力を持つところまで学ぶことであるが、学ぶとはケアすることによって得られる新しい経験や考えを通して自己決定できるようになり、良い選択とその責任を持つことができるようになるとともに、自らに正直になり、社会や自然の秩序に気付くようになるというものである。

次に、ケアリングの哲学的観念の成長に関する内容が始まる。ケアの本質的な特性を発見し探索することにより、私は“ケアする”ということの哲学的観念が成長していくのを援助する。その適用範囲が広がり、はっきりしてくると、見掛け上は全く共通点がないような様々な活動が、ケアする機会を提供してくれる点で関連していることが明らかになってくる。また、一般性における成長 (growth in generality) に伴って、特殊性における成長 (growth in specificity) がある。つまり、普遍的な観念は特殊な活動をよりよく理解

することの助けとなる。ケアするという概念（the concept）は、「信頼」、「正直」、「謙遜」など他の深遠な概念との関連を明らかにすることで進展し、例外に見える概念にも及び成長していく。それらは互いに意味を深め合い、正確さを持つようになる。この観念の成長により、基礎となる仮定は何か、それは何ができて何ができないのか、その一層の発展のためには何が関連し、何が無関連なのかに関する理解が深まっていく。私は、ケアの主要な要素を発見し記述するだけでなく、より広い文脈の中でそれを捉えるとともに、一つの統一体（a whole）と捉えた人の人生において、それがいかに機能し、機能し得るかを考えることによって、ケアするという概念を促進する。

哲学的観念の成長についてMayeroffは、ケアすることを通じてケアの本質的な特性を発見し探索することにより、哲学的観念が成長すると考えていることがわかる。それは、その成長によって適用範囲が広がり、様々な活動にケアの機会を見出せるようになるからである。言い換えれば、自らのもつケアについての哲学的観念によって、特殊な個別のケアに臨むが、その特殊性故に一般的な観念とは矛盾する現実と直面する。しかし、その新しい経験に対処し、乗り越えていくことによって新しい知識が得られ、その知識が元の観念と統合することにより、より広くより深い新たな観念が形成される。こうした積み重ねによって、ケアの哲学的観念が成長していくのである。

3. ケアの主要な要素

ケアにおける「主要な要素（major ingredients）」という章では、8つの概念とケアとの関連が説明されている。以下に、その要点を順に示したい。

誰かをケアするには、「**知ること（Knowing）**」が必要であり、単なる行為や温かい関心だけでは足りない。それは、相手に関する知識（knowledge）であり、それに応える自分の力と限界に関する知識である。知識には「一般的な知識」と「個別的な知識」があり、互いに補い合う。つまり、前者を駆使してケアに携わり、ケアする中で得られる後者によって前者の広がりや深み

が増す。ケアから得られる知識は、言語表現によって知る「明確な (explicit) 知識」とそうではない「暗黙的な (implicit) 知識」、「それを知っている (knowing that) という事」と「どうするかを知っていること (knowing how)」、自ら経験し感じ取り理解する「直接的 (direct) 知識」と何かについて情報 (information) を得る「間接的 (indirect) 知識」のすべてを含んでおり、他人の成長を援助する上で様々に関係している。尚、注意すべきことは、われわれは「明確な知識」、「それを知っていること」、「間接的な知識」を知識だと思い込む傾向が強く、「暗黙的な知識」、「どうするかを知っていること」、「直接的な知識」に十分考慮しないことである。ケアする中で後者に気付き、それを知ることにより自らの知識を一層豊かにすることが重要なのである。

「リズムを変えること (Alternating Rhythms)」とは、端的には単なる習慣に従うだけではケアはできないということである。実際にケアする中の経験から学び、工夫し、やり方を変えてみることによって様々な状況の中で、それぞれに適切なケアのリズムを自ら作り出せるようになるということである。

ケアでは「忍耐 (Patience)」によって、相手のいい時に、相手に沿った方法で相手を成長させることができる。花や子供の成長を強制できないように、重要な考えの成長は強制できない。忍耐により相手に時間を与えることで、彼らは自らの時間の中で自らを見出す。しかし、忍耐とは座視ではなく、全面的に身を委ねる相手への関与のあり方である。忍耐は時間的側面だけではなく、相手の生活にゆとりを与え生活範囲を広げる。また、忍耐とはある程度の混乱やまごつきへの寛容も意味する。寛容は相手の成長への尊敬の表明であり、成長に欠かせない無駄なことや自由なふるまいの真価を認めることでもある。ケアする人は、相手の成長を信じるが故に忍耐強い。

ケアにおいて、「正直 (Honesty)」とは積極的なものであり、単に嘘をつかないとか人を騙さないといった、何かをしないことではない。正直とは、自分自身に正直であるということであり、現実に自分と向き合い自らに心を開くことを指す。ケアにおいては、偽りなく見ようと努めることにおいて正直である。他者をケアするには、私がそうあって欲しいとかではなく、ある

がままに相手を見なければならぬ。相手の成長を援助するには刻々変化する本人の要求に応じねばならぬので、決まった見方で見なければならぬかたたり、単に自分が思うように見るだけならば、相手の本当の姿を見ることはできない。事実が不愉快なものでも真剣に捉えて相手に接し、ケアすることができるものとして尊重する。正直であっても誤りを犯すことがあるかもしれないが、私は誤りに向き合い、誤りを正し、自らの誤りから学ぶ。相手を援助したいという私の欲求が、誤りによって歪んだ状態の修正を迫る。正直がケアの手段だというのではなく、ケアに不可欠な要素だという意味で私は正直である。相手が私に対して率直であるためには、私自身が相手に対して率直でなければならぬが故に、私は相手に心を開かねばならぬのである。

相手への「信頼 (Trust)」とは、彼を独立した存在だと認めることである。彼が過ちを犯しても、その過ちから学ぶことができると信頼する。また、ケアされる人が、相手は私を信頼していると実感することにより、その人はその信頼を正当なものと思われ、自らの成長への確信を高める。相手を信頼することは相手に任せて手放すこと (to let go) であり、危険な要素を含む未知への跳躍であるが、共に勇気がある。信頼が欠けると私たちは相手より優位になろうとしたり、無理に型に押し込めようとしたり、成果の保証を求めたり、過剰なケアを行ったりする。また、相手を信頼する一方で、自らのケアの能力も信頼しなければならず、自らの判断力と誤りから学ぶ能力に自信を持つとともに、自らの直観を信頼しなければならぬ。自分の行動が正しいかどうかにはばかり気を取られていると、自分への信頼が欠け、自分にばかり注意を払っていると、相手の要求に無関心になってしまうのである。

「謙遜 (Humility) はケアの中にあるものであるが、その様態にはいくつかある」(p.55)。ケアは相手の成長への応答であり、相手について継続的に学ぶことを含むので、常に学ぶべきより多くのことがあり、原則として私のためにならないものなど何もない。ケアは常に新しいものなので、問題は、常に直面するこの新しい状況で何が適切かということであり、専ら原則の機

械的な適用を要するだけの過去の単なる反復ではない。また、謙遜とは私の特定のケアがいかなる特権もないと自覚することでもあり、究極的に重要なのは、私のケアがあなたのケアよりも重要かどうかということではなく、ケアできるということであり、ケアする何かを持つということなのである。

ケアすることは、相手を私の欲求の満足の対象や、克服すべき障害と考えたり、自分の気に入るように相手を扱ったりする態度を戒めるという広い意味での謙遜である。相手に対して自らの力を過大視する傲慢さ、何かを成し遂げる中で、自分では如何ともし難い様々な状況の協調作用に、いかに多くを依存しているかに盲目となっている傲慢さを克服するという意味でもある。謙遜はまた、自惚れを克服し、自分を見せびらかしたり逆に秘密にしたりせず、あるがままの自分自身をさらけ出すことでもある。ケアを通し、自分の能力やその限界が本当に理解でき、自分の能力を上手に活用することで誇り（pride）が持てるようになる。その誇りは自分が何をしたいのか、相手からの協力や諸々の条件にいかに頼っているかという自らの依存の範囲を、率直に認識することを伴う。こうした意味で、誇りと謙遜が両立しないということはないのである。

私のケアを通じ、相手が成長していくという「希望（Hope）」がある。これを希望的観測や、根拠なき期待と混同してはならない。希望は、望むべき将来の十分さと比べた現在の不十分さではなく、現在の豊かさの表現であり、可能性の期待で生き生きとした現在そのものである。ケアにおける希望と将来との関連は現在の意義を拡大させるが、それは将来の何かに現在を従属させ、現在を単に手段とすることではない。様々な可能性に満ちた現在の表現である希望は、ただ外界からの何かが起こるのを待つことでも、単なる他者への期待でもなく、私のケアを通じた相手の自己実現（realization）を望むことなのである。それ故、希望の一つの重要な様相は勇氣である。勇氣は、困難な状況でも相手の側に立つこと、安全や保障の域を超えた危険に立ち向かうことに見出される。勇氣が希望を可能にするだけではなく、希望が勇氣を生み出すのも真実である。それは希望があるということには、献身

(commitment) の価値を持つ何かがあり、またはあり得ることを含んでいるからである。

「**勇気 (Courage)**」とは、未知へ踏み入ることである。ケアにおいて、どこに終わりがあるのかとか、私自身を見つけ出すことに関して未知な状況の中では何も保証はない。私には慣れ親しんだ安心の道標はなく、相手が誰なのか、何なのか、私はどうなるのかということは全く予想できない。それでも、相手が成長していくことと私のケアする能力に対する信頼が、私に未知の世界に分け入って行く勇気を与えてくれるのである。

以上が、Mayeroffが提示している8つのケアの主要素であるが、これら全体からわかることは、こうした深遠な意味を持つ各々の概念がすべてケアということに結び付き、ケアを通じてそれらが織り合わされているということである。ケアするということは、実際的で一回一回個別の特殊な活動である。それ故に実際にわれわれがケアに当たろうとする時には、それは常に新しい面を持ち、未知なことを含むものである。われわれは、これまでの経験によって得た知識を駆使してケアに当ろうとするわけであるが、それを機械的に当てはめるだけでは思い通りにいかないことが多い。それを感じ取る時、われわれは自らの判断により工夫を凝らし対処する。もちろん、それによって上手くいかないこともあるが、そこから新しい経験と新しい知識を得る。

こうした新しい個別の特殊の活動であるケアに意義を認め、相手の成長を信じて、失敗を恐れず果敢かつ真摯に取り組み、その結果を謙虚に受け止め、今後のケアに活かしていく。そのためには、これらの要素が不可欠なことと同時に、こうした他者のケアを通じて、ここで要素と呼ばれている深遠な意味を持つ概念が活かされ、また補充され、互いに関連し合いながら深みと広がりが増し、ケアへの応用範囲が広がっていく。さらに、その広がりがまた概念の成長を促すことになるということなのである。

4. ケアの主要な特質

続いて、「ケアの主要な特質 (Some Illuminating Aspects of Caring)」という章を立てて、7つのケアの様相が提示されている。

(ケアをとおしての自己実現)

「ケアにおいては、他者が第一義的に大事なものである。他者の成長こそケアする者の関心の中心なのである」(p.68)。ケアでの無私 (selflessness) は、パニックや何かの慰み事で自分を見失っていることとは全く違い、純粋に関心を見い出したものに惹き込まれていくようなこと、より私らしくなるというようなことである。他者をケアし、成長を助ける中で私は自己を実現する。ケアする中で信頼、理解、勇気、責任、専心、正直などの力を使い私も成長する。私の関心の焦点が他者にあるからこそ、私はその力を活用できる。他者が成長のために私を必要とするように、私も私自身であるために他者を必要とするのだが、私が本質的に他者を私の必要を満たす手段だと感じ取ってはいない。私は自己の実現のために他者の成長を助けようと努めるのではなく、他者の成長を助けることによって、私は自己を実現するのである。

この「自己実現」という言葉は、Mayeroffの説くケアリングにおいて重要なキーワードなのであるが、それは序で述べられていた“人生の落ち着き場所にいる (in place)”という概念と深く関連している。故に、これについては別稿 (後編) において考察していきたいと考えている。実は、自己実現は自己の成長によってもたらされるので、現時点では、自己の成長のためには他者の成長が欠かせず、論理的に「他者の成長を助けることによって、私は自己を実現する」と表現されていると解釈しておきたい。

(過程の第一義的重要性)

「ケアにおいては、成果 (product) よりも過程 (process) が第一義的に重要である」(p.71)。私が他者の世話をする (attend) ことができるのは現在だけであり、コントロールが可能なのも現在だけである。過程に対する漠然とした焦燥や、それを完全に取り除きたいという願望は、成長とは何かに関

する無知の露呈である。ケアにおいて現在は、過去と将来との極めて重要なつながりから切り離せない。それは、現在が過去からの意味と洞察により教えられ、新しい成長の見込みのような将来の予期によって豊かになるからである。もし現在（過程）が真剣に受け取られず、必要悪であるとか、将来の単なる手段として、本質的に将来（成果）に従属させられるならば、ケアすることは不可能になる。成果は過程が成長して生じるものであり、換言すれば、過程は形成過程における成果なのである。（まだ見ぬ現在である）将来への私の関心の真正さを試すものは、今現在の私のケアだということになる。

Mayeroffの見解において、「過程」という特質はケアについての重要なキーワードであると考えたい。一言で言えば、ケアするというところに、俗にいう完成はない。それは成長には完成形などなく、それもまた過程であると考えられるからである。成長は他の誰かをケアした成果ではなく、ケアする過程の中でもたらされる動的なものであるということを指摘しておきたい。

（ケアする能力とケアを受ける能力）

もし、私が誰かのためにケアするのならば、私はそれをうまく処理できなければならぬ。私はそのケアに精通しなければならないのである。単に、相手をケアしたいとか、その成長を熱望するだけでは不十分であり、私はその成長を助けることができなければならない。同様にその相手もまた、ケアを受けることができる能力がなければならないのである。

（ケアの対象が変わらないこと）

「ケアは連続性を前提としている」（p.78）。もし、相手がしきりに入れ替わるようなら、ケアは不可能である。相手が変わらないままでなければならないのは、ケアするということが発展的な過程だからである。また、相手が変わらないものだと、私に感じ取られてもいなければならないのである。

上記の二つの特性は、先にMayeroffが、実際のケアの場面における他者とは、常に特定の誰かであると指摘していたことと符合する。

（ケアにおける自責感）

「ケアする人は相手に自分自身をゆだねている」（p.80）。私は依存できる

者として自分自身を差し出す。もし私の無関心や怠慢により関係に深刻な断絶が生じるなら、あたかも相手から非難されているような自責感 (guilty) を感じる。この自責感は相手を裏切ってしまったという私の気持ちがかた然とするものであり、私の良心がそれを思い出させる。自責感は、私に何が悪いのかを教えてくれる。それを深く感じ理解し受け入れるならば、自責感は相手への責任を負うべき者に立ち返る機会を提供してくれる。しかし、私は自責感の克服のためにケアを再開するのではなく、復活したケアによって自責感を克服するのである。さらに、私は相手の成長に共鳴し私自身の延長と感じ取っているので、それを無視することは同時に、自らに対する私自身の応答性にも破綻をもたらす。自責感は単に相手への裏切りのみならず、自分自身への裏切りの表れなのである。良心は、私を相手と私自身の双方へと呼び戻してくれる。他者との破綻の克服によって、私は私自らの破綻をも克服する。

Mayeroffは、ケアの主要な要素の一つとして「信頼」を挙げているが、裏切りは、この信頼に反する行為である。自責感によって破綻を克服することは、取りも直さずこの信頼を取り戻すということであり、それによって自己の成長の破綻が克服できるということなのである。

(ケアの返報性)

ケアには、返報性 (reciprocation) がある場合とない場合があるかもしれない。もの (things) は、私からものへの応答のように、私に応答することはできず、それらの個性の大部分は私により与えられる。一方、人に対するケアは、相手からの応答に大きな差がある。例えば、子供へのケアと深い友情におけるケアとでは、後者の方に高い相互性があり、その場合のケアは相互に伝染する。私から相手へのケアは、相手から私へのケアの活性化を助け、同様に、相手から私へのケアは、私から相手へのケアを強化するのである。

しかし、多くの場合ケアにおける関係では、返報性の関係は稀だということに覚悟しておいた方がよさそうである。深い友情におけるような返報性の方が例外なのであり、そもそもケアは返報を求めるものではないのである。

(ケアであるといえる範囲)

「ケアには、ある程度の錯誤と、相手の欲求に対する関心、感受性の推移とがつきものである」（p.87）。ケアには浮き沈みがあるが、それは良かれ悪しかれケアの範囲（limits）内での程度問題である。注意すべきは病的な依存関係や悪意ある操作や過保護が、ケアの範囲外にあるということである。もし私が相手を、それ自身の本来の権利故に存在するものと本質的に感じ取っていないならば、他に何が順調でもケアは成立しない。もし私に、実際に相手の成長の手助けになっているか否かに照らして、行動を修正する欲求や能力がなければ、それはケアではない。また、私のケアの見極めには、自らを省みるのみでなく、私が行う結果として相手の成長があるか否かも見なければならぬ。

これまでMayeroffは、何度かケアすることは依存関係や過保護ではないと述べているが、それは、それらがケアの程度の問題ではなく、そもそも範囲外のことだという理由であったことがわかる。

5. 他の人をケアするということ

「自分以外の人格をケアするには、私はその人とその人の世界を、まるで自分がその人になったように（as if I were inside it）理解できなければならない」（p.93）。つまり、彼にとって人生とは何か、どうあろうと努めているのか、彼は成長のため何を必要としているのかを内面から感じるため、彼の世界に共にいることができなければならない。また、私が彼の成長への努力を理解できるには、私自身の成長への要求を理解し応答していなければならない。それは私が私自身を理解できて始めて、他の人についても理解できるからである。しかし、相手の気持になるというのは自分を見失うことではなく、彼の世界を見ると言っても、彼と同じ反応をすることではない。だからこそ、私は彼の援助ができるのである。例えば、彼の困惑を認識したからといって自分まで困惑することではなく、それを内面に感じているからこそ、私は彼を困惑の外へ救い出せる位置にいるのである。こうした理解は、いくらでも

細かいところに入り精しく検討できるので、そうした新しい経験と知識から学ぶことによる、私の弛みない成長にとって重要なことなのである。ケアにおいて、私が相手と共にいるということは、相手のためにあるということと固く結びついている。私たちのどちらが上か下かなどといったレベルを超越し、どちらか一方の犠牲の上というのではなく、共にいるのだと認識されるのである。

一方、ケアされる人は、ケアする人がおざなりでなく、私ならどう思うかを彼が知っていると感じているので、私はケアする人に理解されていると感じる。だから、私は自分自身を開示して距離を縮め、彼が私をより助け易くなるようにすることができる。広い意味で共にいる（“being with”）ということは、ケアすること自体の過程を特徴付けている。つまり、それはケアすることにおいて、単に外側から彼について知っていることではなく、彼の世界において本質的に彼と共にいると言えることなのである。他の人をケアする時、私は彼を励まし彼自身であることに勇気を持つよう動機づける。私の彼への信頼が、彼に彼自身を信頼しそれに相応しくあるよう励ます。彼の成長が私に賞賛や自然に湧き上がる喜びや嬉しさを引き起こすのを、彼が実感することほど彼を励ますものはない。また、こうした彼の気付きは、彼本来の姿に立ち返らせる一つの道筋である。だが、この湧き出る喜びとしての賞賛をお世辞と混同してはならない。賞賛は私をケアされる人により近づけるのであり、そこで私は彼を彼のままに見ることができる。他者をケアする中において、私は彼が成長し自己実現すると信頼しているとは言え、彼が私を信頼するのは、彼の成長において私が彼のため、彼と共にあるために今、私がいるからなのである。

このようにMayeroffは、他の人をケアすることについて詳しく語っている。これは、ここまで断片的に語られてきた他の人へのケアに関する知見の整理とまとめだとも考えられる。さらに、それは肉付けされ、新しいニュアンスも加えられているので、軽視することはできない。また、次項の「自分自身に対するケア」との対照性を考慮した整理だとも言えよう。

6. 自分自身に対するケア

「自分自身をケアするということは、“ケアすること”という属（genus）の中の種（species）の一つなのである」（p.103）。専心、信頼、忍耐などケアのすべての特性は、そのまま自分自身のケアにも当てはまる。しかし、このケースでは、それ自身の権利において存在しているという私の認識を伴った相手との結び付きとは、違うものだと理解されなければならない。なぜならこのケースにおける相手とは、私に他ならないからである。また、自己中心主義（egocentricity）とは自己に病的に囚われ、他者の要求を意に介さないことであるが、自分自身をケアする上で自己中心主義はあり得ない。その理由の一つは、自己の偶像崇拜化と他人からの賞賛に囚われるという特徴を持つ自己中心主義は、私自身を成長させる援助には何ら関係ないからである。もう一つは、私自身をケアするには、私自身の外部にある誰かないし何かをケアする必要があるという点である。つまり、私は、私自身以外の相手に役立つことによってのみ自己充足（fulfill myself）できるので、もし私以外の相手をケアできないのなら、そもそも私自身のケアなどできないのである。何かについて理解し認識する人、成長のための自らの必要性を理解しそれに応えようと努める人のみが、真に成長できるということなのであろう。

7. 考察

冒頭で触れた、序の初めにある「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである」という言説の意味を解釈していきたい。先にも述べたが、「自己実現」について本稿では、自己の成長によってもたらされるものという解釈に留めていることを断っておきたい。まず、成長についてであるが、Mayeroffは成長を「人の成長」と「ケアリングの哲学的観念の成長」とに分けて提示していた。それらの内容の説明をここでは繰り返すことはしないが、どちらも自分以外の

誰かをケアすることを前提として成長することが示されていた。さらに、その成長が自分自身をケアすることにつながっていく。実は、それがさらに自己実現につながっていくのであるが、この点は別稿（後編）で考察したい。

ここで、「成長するのを援助することは、少なくとも (at least) その人が、何かあるもの、または彼以外の誰かをケアできるように援助することにほかならない」という言説を組上に載せたい。これを成長についての言説に書き換えると、「成長するとは、少なくとも何かあるもの、または彼以外の誰かをケアできるようになること」とすることができる。これは、上記のMayeroffの成長に関する見解の通りである。「少なくとも」という修飾語は、自らの成長のためには誰しも、まず自分以外の誰かに対するケアに携わらなければならないことを意味しているものと考えられる。それ故に、ある人の成長を援助することは、彼が彼以外の誰かをケアできるように援助することなのである。そして、その援助によって彼は、その誰かをケアすることにより成長するのである。

次に、「最も深い意味で (in the most significant)」というフレーズについて考えてみたい。これについては、ケアリングの哲学的観念を説明する中の一文に、「ケアするという概念は、「信頼」、「正直」、「謙遜」など他の深遠な概念 (significant concept) との関連を明らかにすることで進展し、例外に見える言葉にも及び成長していく」という言説があったことを指摘したい。特に、そこで“深遠な”概念という言葉が使われていたことである。その例として挙げられている「信頼」、「正直」、「謙遜」は、ケアの主要素として説明されていた。そして、他者をケアすることによって、哲学的観念の成長がもたらされ、それぞれの要素がより深く正確に理解され、ケアを通じてお互いに関連性を深めていくと記されていた。“深遠な”という言葉の一致は偶然かもしれないものの、こうした哲学的な観念の成長にまでケアが及んでいることは、「他の人をケアするということは、最も深い意味で、その人が成長することを助けることである」という文章に照らして違和感はない。

次に、著書の中に何度も現れる、「ケアの相手が成長するのをたすけるこ

ととしてのケアの中で、私はケアする対象を、私自身の延長のように身に感じとる。また、それと同時に、その対象が本来持っている権利ゆえに私が尊重する確かな存在として、私とは別のものとしてそれを身に感じとるのである」という内容の言説の意味について考えてみたい。「本来持っている権利」というフレーズは既に、ケアする相手の持つ「様々な可能性」と「成長する欲求」であるとしたのだが、問題は、ケアの中で相手を「私自身の延長のように」感じとる一方で、「私とは別のものとして」感じとるという一見矛盾して見える記述の意味である。実は、これも相手の持つ「様々な可能性」と「成長する欲求」によって説明できると考えられる。つまり、「私とは別のものとして」感じとるのは、本来相手が持っている権利であると説明したが、特に、「様々な可能性」が含んでいる個別性のためだと考えたい。つまり、それは人それぞれに異なる可能性であり、ケアする私と相手とでは、あくまでも別のものだと自覚するということである。それに対して、「私自身の延長のように」感じとるのは、もう一方の「成長する欲求」ではないだろうか。つまり、成長する欲求は私も相手も共に持っているものなので、私自身の延長として、すなわち私も相手も共に成長を望む者として考えるということである。このように考えると、相手の方向性（つまり彼の「可能性」）を尊重しながら、相手の“志向任せ”（つまり「成長する」ことからの逸脱）ではないというようなフレーズの意味も理解できるのである。

以上で本稿の筆をおき、これを進展させて別稿（後編）では、Mayeroffの考える「ケアすること」と「生の意味」との関連について考察していきたい。

[注]

- 1) 本稿では、基本的に邦訳書『ケアの本質』を座右に、内容を照合しながら原著“On Caring”を読み進めていく。それは、邦訳書が既に本邦の研究者を含む多くの読者に親しまれていることを考慮したものである。なお、訳語ではニュアンスが伝わりにくいと思われる部分は、括弧に入れて原語を挿入した。また、

引用部分の頁番号は邦訳書に拠り付しているが、引用に拠らない部分は邦訳書に配慮しながら、基本的に筆者が原文から訳出したものとなっている。

- 2) Mayeroffが、ケアの対象を人だけに限定せず、“brain child”という言葉当てた哲学的または芸術的なアイデアを始め、理想、共同体などといった他の多くのものも対象としていることは一つの特徴である。これについて西田(2015)が、Mayeroffに関する先行研究をサーベイした結果、傾向として「[ケアの対象は人である]という前提でメイヤロフのケアリング論を捉え」(p.38)ているものが多いと指摘している点には、筆者も確かに同感であるが、ケアリング自体が本来、人と人との関係に根ざしていることに鑑みれば、そうした傾向自体は仕方ないのだろうとも考えられる。しかし、それに続けて西田が、先行研究にはMayeroffの「主張の中の一部を取り出して検討しているものが多い。また、それぞれが立脚する分野からメイヤロフの理論をどのように理解し使えるかということの検討でおわっている」(ibid.)としているのは的を射た指摘である。ここでその例を挙げることはしないが、確かに先行研究の中にそうしたものが多いことは否定できない事実である。
- 3) このフレーズに触れた時、違和感を覚える人がいることも事実である。例えば、「メイヤロフ『ケア活動論』の問題点」と題されている上野(2015)では、「これはプラトンの『エイテュデモス』における「善い人」は「善い人を作る人である」という無限進行に同じなのだ。プラトンはこのばかばかしさの原因を見抜いて、(それ自体で善であるもの)を見失ったせいである、としている(292D-E)」(p.37)とPlatoを引きながら手厳しい批判を加えている。尚、この批判については、本稿においてMayeroffの真意を読み解く中で、それが当たらないことが明らかになっていくだろう。
- 4) ここで、邦訳書では“information”という言葉が“知識”と訳されているが、後の「ケアの主要な要素」の項において同様に“知識”と訳されている“knowledge”とは異なることに注意しておきたい。
- 5) 実は先行研究において、この“再創造”という言葉 키워ワードとして、Mayeroffの説くケアの要諦が再創造にあると指摘しているものが散見される。先走って言えば、確かに、ケアを通して人の生(life)が変わっていくことは重要なのだが、その変容にケアがどう関わっているかという点が肝要なものであり、それが正確に捉えられているかどうか疑問である。細かいことを言えば、邦訳文中の“全人格的に受けとめていくことをとおして”という表現の部分は原文にはなく、その影響もあって余計“再創造”という言葉が印象的に映るものと考えられる。強いて言えば、“re-creation”という言葉は、その変容の一つの表現に過ぎず、こうした、いかにもしかつめらしい言葉の既成概念に、読

み手が引|つ張られているように思える。同様に、「成長」や「自己実現」という言葉についても、既成概念だけで解釈されているのではないかと思われる先行研究も見受けられるが、まさに、こういう既成概念の影響に関して、後の「ケアの主要な要素」の項の中の「知ること (knowing)」に関する説明において、Mayeroffは警鐘を鳴らしているのである。

[参考文献]

- 上野正二「メイヤロフ『ケア活動論』の問題点」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』52, 2015, pp.31-56
- 西田絵美「メイヤロフのケアリング論の構造と本質」『佛教大学大学院紀要 教育学研究科篇』43, 2015, pp.35-51
- Mayeroff, Milton “*On Caring*” Harper & Row Publishers, 1971 [田村真・向野宣之訳『ケアの本質』(ゆみる出版)1987]

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Close Reading of Milton Mayeroff's "On Caring" (I):
Understanding the Role of Growth in Caring (Chap.1-4)

Osamu OGAWA

In this paper, I conducted a close reading of the book written by Milton Mayeroff "On caring". Mayeroff wrote in the introduction as follows. "This small book deals with these two related themes: generalized description of caring and an account of how caring can give comprehensive meaning and order to one's life. The two concepts, "caring" and being "in place," provide a fruitful way of thinking about the human condition, and, what is more important, they may help us understand our own lives better." In this book Mayeroff presents two important concepts, one is "caring" denoting the concept of helping other's growth and the other is "in place" denoting being in one's own place of one's own life by caring for others. He explored both concepts philosophically.

Therefore, in this paper, I clarified some opinions of Mayeroff about the concept of caring by considering the keyword "growth" to understand the role of growth in caring. I also clarified the meaning of the opening sentence of the introduction, "To care for another person, in the significant sense, is to help him grow and actualize himself." In addition, at that time two important concepts "devotion" and "process" helped understanding.

The conclusions of this paper are as follows:

1. Everyone for their own growth must first care for others. Therefore, in order to promoting the growth, we must help them to care for someone else, in this way people can grow by caring for someone.
2. Caring for others brings about the growth of philosophical ideas with significant concepts such as "trust", "honesty", "humility" and so on becoming deeply and accurately understood. Understanding through the concept of caring will also deepen the relevance of such concepts.
3. Mayeroff's concept of "own right" refers to a person's "potentialities" and "the need to grow", and is also the main premise of his logic.